

## ま え が き

三番瀬再生計画検討会議(円卓会議)は当初から二つの目的を持っていました。一つは東京湾の最奥部にある三番瀬の貴重な自然を再生する基本計画を作ること、もう一つはこの計画作りを住民参加で実行することでした。

第一の目的である自然再生は利害関係者の意見の対立が激しく、難航しましたが、2年間にわたる真剣な議論を経て、現時点でできうる最善の再生計画を練りあげました。

陸域では、今ある護岸を撤去して海に返すべきだという声があり、その反面、海に砂を入れて潮の流れを良くするべきだという意見がありました。地権者や漁業関係者の権利の確保も重要でした。そうした議論の中で、徐々に歩み寄りが必要とされ、浦安、市川、船橋の護岸の一部をそれぞれ改良して「海と陸との連続性」を確保することになりました。この3か所の改良は全国でも稀に見る実験であり、成功すれば今後の湿地回復や護岸工事の先駆的な事業になる、と自負しています。

海域の方は、実地調査を行いながらの議論が続き、時間との競争でしたが、陸側の議論を視野に入れながら、きれいな海を取り戻し、漁業が復活して豊かな生態系が維持されるための基本計画を提示することができました。加えて、国土交通省が東京湾全域の浄化計画を打ち出し、周辺河川についてもさまざまな改善計画を検討しており、今後10年、20年かけて三番瀬をめぐる大きな範囲での水質改善の目途が立ってきました。今回、円卓会議がまとめた三番瀬の再生計画は、こうした国の政策と並行して、着実に進展する見通しとなっています。

第二の目的は、住民参加による円卓会議の実施でした。県当局が基本案をとりまとめ、それを審議会などに諮るという従来の方法ではなく、初めから終わりまで、住民参加、住民主導で運営していくという方法ですが、これほど大掛かりな公共事業を取り仕切るのは全国でも例のない試みでした。予想通り、円卓会議は初めから荒れました。議論の基本が守られなかったり、同じ衝突が繰り返され、県民からも批判を浴びました。しかし、委員の皆様の粘り強い議論のおかげで、1年をすぎて中間報告書をまとめる時点で、「できうる限り自然を生かす」という基本方針がまとまりました。残り1年は実施計画を作るために大変な忙しさでした。これまで県当局が通常業務としてこなしてきた作業のほとんどを円卓会議が代わって行う形となり、予想以上の作業量でした。事務局は夏休み、冬休みが取れない忙しさが続き、委員も毎週のように議論に狩り出されました。全体を通じて、この種の手法に対して作業量の見通しが甘かったことが大きな反省点です。

一方、すべての議論は公開され、住民の前に明らかにされました。そのため、県内外からのご批判やご助言が数多くあり、円卓会議では気がつかないところをかなり補っていただきました。その結果、自然再生への足がかりを作るために、なんとでも「海と陸との連続性」を確保しようという機運が生まれ、3か所の候補地を見つけ出すことができました。こうした発想は、既存の行政システムからは出てこなかったと思います。

そして、この 2 年間の努力を担保するために、県の条例要綱案を作りました。円卓会議は三番瀬再生のための第一歩の計画を提示したにすぎません。今後 10 年、20 年にわたる作業が続きます。そのための指針として条例を作り、その中で円卓会議とは違う形の後継組織を設置するよう提案をし、具体的な工事の管理を次世代の県民に託す方法をとりました。

今回のような住民参加型の政策策定方法はわが国ではまだほとんど事例がありません。諸外国の取り組みも社会構造や慣習の違いなどから、そのまま日本で使うことは難しく、手探りの状況で進んできました。しかし、失敗も含めて、こうした手法への確かな手応えを得ることができました。まさに、「住民参加方式・千葉モデル」と言えるでしょう。

こうした新しい試みが三番瀬から東京湾全体に伝わり、全国に広がっていくのも時間の問題だと思います。また、欧米とは違った社会構造の中での「住民参加方式・千葉モデル」は、途上国を中心にアジア、アフリカなどに大きな影響を与えるものと確信しています。

円卓会議はこうして一応の区切りを付け、報告書をまとめたわけですが、円卓会議が積み残した仕事も数多くあります。ラムサール条約登録の問題、猫実川河口の扱いなどです。いずれも 2 年間の議論でははっきりした結論が出ませんでした。いや、性急に結論を出すよりももう少しじっくり調査し、話し合った方が、より良い解決策を見つめることができるはずだという、円卓会議の経験からの結論でした。しかし、いたずらに議論が長引くことは許されず、後継組織ができるだけ早く解決策を見出さなければなりません。

円卓会議は 2002 年 1 月から丸 2 年をかけて計 22 回開催されました。円卓会議だけでは議論がまとまりきれないため、会議の下部組織として、護岸・陸域、海域、制度小委員会があり、さらに小委員会の下に 7 つのワーキンググループが設置されました。また、これとは別に専門家会議が設置され、小委員会などからの疑問に答える研究、調査、助言を行ってきました。すべての会議の合計は実に 163 回に及びました。

長い間、大変な努力で三番瀬再生のためにお骨折りをいただきました円卓会議の委員、オブザーバー、傍聴者の方々、パブリックコメントや説明会などで貴重なご意見を下さった県民の皆様に深く感謝いたします。

円卓会議の報告書は堂本暁子千葉県知事に提出され、それを受けて千葉県が具体策を詰め、条例案は県議会で審議していただくことになっています。この報告書が生かされる形で政策を実行していただきたいと、委員一同心より願っております。

2004年1月22日  
三番瀬再生計画検討会議会長  
岡島 成行